大谷大学所蔵貝葉写本：Āditajātaka について

—ビルマ (Zimmé) 版および北タイ (Lanna) 版との比較—

村 西 弘 行

パーリ聖典に属さない「パンニャーサ・ジャータカ」(Paññāsajātaka) と呼ばれる別種のジャータカ集が、東南アジアに存在することを初めて指摘したのはフランスの学者 Léon Feer である。彼は、1875 年に論文“Les Jātakas¹⁾”で、仏国立図書館にシヤム将来のカンボジア文字貝葉写本 2 種があり、それは Paññāsajātaka (以下、PJ と称する) と呼ばれる外典のジャータカ集成であると述べた。1917 年、Louis Finot は“Recherches sur la littérature laotienne²⁾”において、これらはインドシナ半島ではポピュラーなもので、ラオス、ビルマ、カンボジアの三つの版の写本が存在すると伝えた。その後しばらく研究は中断するが³⁾、1981 年 P. S. Jaini が PTS からビルマ版校訂本“Pannāsa-jātaka or Zimmé Paññāsa”を公刊し、PJ は広く世に知られることとなった。1998 年チェンマイ大学は、北タイに流布する Nissaya 形式⁴⁾ のランナー文字 PJ 貝葉写本 56 話を中央タイ文字に変換して“*A Critical Study of Northern Thai Version of Panyasa Jātaka*”と題し出版した。

一方、大谷大学図書館が所蔵するクメール文字貝葉写本の中に PJ 27 話が含まれていることが判明し、1998 年大谷大学吉元信行教授を中心に本格的な研究が開始された。またすでに 1980 年に PJ に関する日本での最初の論稿を発表した東方学院田辺和子博士との共同研究も成立し研究は進捗した。2004 年 3 月に大谷大学が所蔵する貝葉写本から PJ 25 話の romanization が完成し“*Pannāsajātaka kept in the Otani University Library*⁵⁾”が発表された。なお、研究の途上で大谷大学が所蔵する PJ 写本は、現タイ王室版 PJ 写本⁶⁾ と内容が一致することが確認された。

本稿は、大谷大学所蔵 PJ 写本 (タイ版) から第 13 話：Āditajātaka を取上げ、同一話であるビルマ版 (Zimmé Paññāsa) の第 1 話：Ādittarājajātaka と北タイ版 (Northern Thai Version) の第 43 話：Ādittarājajātaka とを互いに比較し、これら三つの版の特色を解明しようとするものである。

物語のあらすじは、ある明け方、Ādita 王は一人の老いた婆羅門がやって来て食物を乞う夢を見る。王は夢から覚めて、乞求者が来て外面的 (bāhira; 食物など)

な布施を乞うであろうが、内面的（ajjhattika；眼、手足など）な布施を乞うがよいと考える。王がこのように考えたとき大地は震動し帝釈の座所が熱くなる。帝釈はその原因を知って、自らを婆羅門に化作し都に入り、「大王よ、そなたの妃をわたしの妻にいただきたい」と乞う。王は、妃よりも百倍も百千倍も一切智を得ることを望んで妃を婆羅門に布施する。そこで帝釈は王をほめたたえ、妃を返して、十の王法（dasarājadhamma）に励むよう勧めて、天の住処に戻るといふものである。これは Vessantarajātaka[No.547]の王妃マッディーを布施する場面を模した作品である。以下に、例文として王が夢から覚めて内面的な布施を思ふ場面を抜き出し、大谷所蔵本（タイ版）、北タイ版、ビルマ版、そして借用された Vessantarajātaka の該当部分を比較し、各版の特色を見比べることにする。

[北タイ版] so rājā pabujjhivā vicāretvā supinaṃ cintetvā yācako āgantvā pāto va ajja yacissati bāhiradānaṃ yācako yāceyya ajjhattikadānaṃ yo yācako yāceyya sīsaṃ maṃ ahaṃ chinditvā sīsaṃ dadeyyaṃ tassa yo yācako sace yāceyya hadayaṃ ahaṃ chinditvā uraṃ niharitvā gahetvā hadayaṃ paggharanta lohitaṃ dadeyyaṃ tassa

彼の王は眼を覚まし夢を思つて考えた。乞求者が今日の朝まさに来て外面的な布施を乞うであろう。乞求者は内面的な布施を乞うがよい。その乞求者が私の頭を乞うならば、私は頭を切つて彼に与えよう。もしその乞求者が心臓を乞うならば、私は胸を切つて心臓を取り出し掴み上げて、血の滴が流れるままに彼に与えよう。

[大谷所蔵本（タイ版）] rājā pabujjhivā supinaṃ vicāretvā aj (j) apāto yācako āgamissati ti ṇātvā dānaṃ dātukāmo cintesi sace koci maṃ yācako hadayaṃ yāceyya mama uraṃ bhinditvā hadayaṃ ni (i) haritvā tassa dadeyyaṃ sace me si (i) saṃ yāceyya si (i) saṃ bhinditvā tassa dadeyyaṃ

王は夢から覚めて、夢のことをよく考えて、今朝早く乞求者が来るだろうと知つて、布施をしようと考えた。もし誰か乞求者が私に心臓を乞い求めるならば、私の胸を裂いて心臓を取り出し、彼に与えよう。もし誰か乞求者が私の頭を乞い求めるならば、頭を切つて私は彼に与えよう。

[ビルマ版] amaccehi saddhim āmantetvā attanā dīṭṭhasupinaṃ vicāretvā Ādittarājā sāmaṃ cintesi. ajj' eva pāto koci yācako mama santikam āgantvā maṃ bāhirakam eva dānaṃ yācissati. sace koci maṃ ajjhattikadānaṃ yāceyya tassāhaṃ taṃ dadeyyaṃ. sace maṃ koci sīsaṃ yāceyya, tassāhaṃ me sīsaṃ chinditvā dānaṃ dassāmi. sace maṃ koci hadayaṃ yāceyya, tassāhaṃ mama uraṃ bhinditvā hadayaṃ niharitvā dānaṃ dassāmi.

大臣たちと共に相談して、自ら見た夢を考察し、アーディッタ王は自分で考えた。今日早朝に、誰か乞求者が私の側にきてまさに外面的なものを私に乞い求めるであろう。も

し誰か私に内面的な布施を乞い求めるならば、私は彼にそれを与えよう。もし誰か私に頭を乞い求めるならば、私は彼に私の頭を切つて布施を与えよう。もし誰か私に心臓を乞い求めるならば、私は彼に私の胸を裂いて心臓を取り出して布施をしよう。

[Vessantarajātaka] aṭṭhavaṣṣikakāle pana sayanaṇiṭṭhe nissino cintesi: ahaṃ bāhiradānaṃ eva demitaṃ maṃ na paritoseṭi, ajjhattikadānaṃ dātukāmo ‘mhi, sace maṃ koci hadayaṃ yāceyya uraṃ bhinditvā hadayaṃ niharitvā dadeyyaṃ

八歳のとき、ソファアにすわってかれは考えた：ぼくは、ものばかり与えてきたが、それでは満足できない。よし、このからだをさしだそう。もし心臓がほしいという人がいたら、胸を切つて心臓を取りだし与えよう。(辛島静志訳『ジャータカ全集10』春秋社)

この四つの版を比較し特徴を手短に述べると次の通りとなる。北タイ版は、パーリ語の語順がS+V+Oとタイ語の語順に近いことが目に付く。また、外面的な布施(bāhiradānaṃ)ではなく内面的な布施(ajjhattikadānaṃ)をしたいというVessantarajātakaの文章が下敷きとなっている。大谷所蔵本(タイ版)は、この物語で最も重要な外面的、内面的の考えが言及されていない。これは伝承上の重大な欠損と思われる。心臓の布施では、表現が北タイ版からはyācakoの言葉を引き継いでいて、他はVessantaraによっているがパーリ語の語順は混乱して読みにくい。また、頭と心臓の布施が他版に比し逆の順番となっている。ビルマ版は、冒頭に「大臣と相談して」といった付加があり、内面的な布施という表現も、bāhirakam eva dānaṃ といった原文にとらわれない自由な表現を用いている。心臓の布施では、dadeyyaṃをdānaṃ dassāmiとやわらかい響きに変えるなどの工夫が伺える。しかし、tassāhaṃは、北タイ版の言葉を引き継いでいる。

以上を踏まえ、ここでは一つの例示を行ったに過ぎないが、筆者の他の物語の読み解きも加えて、三つの版の伝承につき次のような仮説を提示しておきたい。

①北タイ版に用いられている語句が大谷所蔵本(タイ版)やビルマ版に引き継がれていると思われる場面が多くあり、北タイ版がその写本の由来⁷⁾も含みPJが編纂された初期の作品に近い姿を保っていると考えられる。

②ビルマ版は、北タイ版と比べると、変容が大きく内容がより説明的となっている。早い時期に伝承があり、その後孤立し独自の磨きが掛かったかに見える。

③大谷所蔵本(タイ版)は、他の版と見比べると、内容の脱落や矛盾が散見される。アユタヤ朝がビルマ軍により徹底した破壊を受け滅亡した(1756年)あと、現バンコック王朝は取り急ぎ仏典や文芸の復興を行った史実が存在する。その混乱が、伝承に欠損を残したのではないかと疑われる。

ここに PJ と呼ばれる聖典に属さない独自のジャータカは、およそ 14 世紀から 16 世紀の 300 年間に北タイで作られたものと言われている⁸⁾。この時期は、チェンマイを中心にランナー王国が栄え、西はビルマ北部 (シャン) から、東はラオス北部 (ルアンプラバン) に至る一大地域が同一文化圏を構成し上座仏教が篤く尊崇されたのであった。当時、物語を語ることはジャータカを語ることであり、vernacular の説話⁹⁾ を通算すれば 500 前後の民話的ジャータカを数え上げることができる。かくしてかの地にジャータカ的一大創作運動が開花したのである。

東南アジアに流布する PJ の物語は、聖典ジャータカと同じように物語のどこかで布施の功德を説いて止まない。戒律の厳しい上座仏教は、在家の布施なしには僧伽は存続し得ない。日々の村々の集いで僧が語ったであろうジャータカに耳を傾ける善男女の姿が見えてくる。在家は来世のために徳を積み、僧は布施を受けるに相応しい戒律の人でなければならない。僧と俗の間に存するこの緊張関係がこの地に独自のジャータカを生み出し、人々の布施する心を育んだのであろう。(本稿は平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究 C (研究代表者 茨田通俊) による研究成果の一部である)

-
- 1) L. Feer: “Les Jātaka” *Journal Asiatique*, Mai-Juin 1857. p. 417-422.
 - 2) L. Finot: “Recherches sur la littérature laotienne” *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, XLVIII, 5, p. 44-49.
 - 3) 単発的に 1956 年 Ginette Terral, “Samuddaghosajātaka” *BEFEO*, XLVII, 1, pp249-351. と 1978 年 Drothy Helen Fickel, “An Historical and Structural Study of The Paññāsa Jātaka”, A Dissertation for the Degree of Ph.D., The Univ. of Pennsylvania の論究がある。
 - 4) 逐語釈の形式で、パーリ語句を一つあげて直後に現地語でその言葉を釈す書法。
 - 5) “*Pannāsajātaka kept in the Otani University Library*” 大谷大学真宗総合研究所刊 2004.
 - 6) 田辺和子・清水洋平 「パンニャーサジャータカ貝葉写本タイ王室コレクション報告」『パーリ学仏教文化学』第 17 号 2003.
 - 7) 底本は、タイ・プレー県ワット・スンメンが所蔵するランナー文字貝葉写本。1835 年にラオス・ルアンパバーンにあるワット・ウィチュンの原本から書写された。
 - 8) “*Panyāt chādok chabap hong samut haeng chāi*” 1925~39, ダムロン王子の序文参照。
 - 9) Anatole-Roger Peltier: “*Tai Khoeun Literature*” 1987, Editions Duang Kamol, Bangkok.

〈キーワード〉 東南アジア, paññāsajātaka, vessantarajātaka

(大谷大学大学院)

try to establish the relationship between the MMT and the *Devīmāhātmya* (abbr. DM), a basic Hindu text of worship of the Goddess, through the analysis of the word “brahmāṇḍa” in the MMT (chap. 1, verse 4) and in the DM and of some adjectives used to describe the deity, Mahāmāyā (MMT chap. 1, verse 4-6). According to my hypothesis, the MMT was composed between the eighth and eleventh centuries.

80. On the Āditajātaka from Palm Leaf Manuscripts kept in Otani University: A comparative study with the Burmese (Zimmé) and Northern Thai (Lanna) recensions

Hiroyuki MURANISHI

There exist at least three recensions (Burmese, Laotian & Cambodian) of the *Paññāsajātaka*, which is a collection of 50 non-canonical jātakas unique to South East Asia. The Burmese recension was published first in 1981 by P. S. Jaini in the PTS series (No.172) as “*Paññāsa-Jātaka or Zimmé Paññāsa*”. In 1998, Chiang Mai University edited and published “*A Critical Study of Northern Thai Version of Panyasa Jātaka*”. Otani University has long held many palm-leaf manuscripts in Khmer script, in which we found 27 stories originated from *Paññāsajātaka*. Here, I make a comparative study of the Otani version of the Āditajātaka with the equivalent story in the Burmese recension: Ādittarājajātaka (No.1) and the Northern Thai version: Ādittarājajātaka (No.43). The Āditajātaka is a story of gift-giving (dāna). The king Ādita gives his beloved queen to a Brahman hoping that he will be a buddha in future. The author seems to have composed this story based on the famous Vessantarajātaka (No.547). Comparing these four texts, I conclude that the Northern Thai version seems to show the oldest style and image of the *Paññāsajātaka*.

81. The Relationship between *vastu* and *nimitta* in the *Yogācārabhūmi*

Taiki MOTOMURA